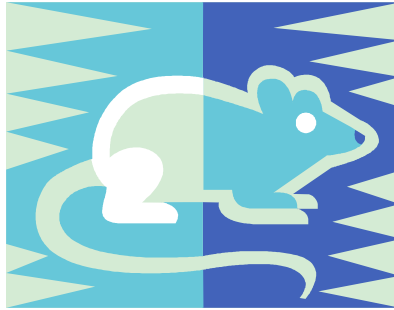


ピンプ

牧草 泉



一、
男は目を覚ました。太陽は既に南中に近かった。テレビをつけた。すでに十一時を過ぎている。「昨夜が少し遅かったからな」と独り呟いた。朝飯とも昼飯ともつかない食事をして家を出た。昼時のアパートの広場は、犬が腹をすかしたのか、植木を盛んにあさっていた。男に気づくと慌てて走り去った。犬があさっていたところにスナック菓子の空き袋が見えた。にんにくの臭いが少しした。

男の行く先は決まっていた。今日は競馬の中日だった。しかし競馬の中日などは男にとつてどうでもいいことだった。競馬が開催されていればよかったのだ。競馬場に行くのは時間潰しのためだった。

朝は夜になればいいと思った。夜になると朝が来れば何とかなるだろうと思った。しかし生活に変化はなかった。時間だけが起伏もなく流れていた。男はいつかこの生活から脱出しなければならぬと思っていた。周囲に空間はあった。遠くを見渡すことができた。手を伸ばせば思いっきり伸ばすことができた。走ればどこまでも走ることができた。それでも男は狭い空間に閉じ込められているような、圧迫感をいつも感じていた。透明な棺を頭から被せられた自分を想像した。女のせいかもしれないと思った。

しかし、女は男の生活になにも干渉しなかった。朝と夜の食事を作ってくれた。偶数日に万札を食卓に置いてくれた。それだけだった。物理的な強制は何もなかった。言葉の強制

もなかった。男はそれが苦痛になってきていた。

万札が食卓に置かれている。初めは気持ちが悪かった。こんな女がいるのだろうか、そう思った。しかし金は、あればありがたかった。だからポケットに入れて競馬場に行った。それほど女が高給取とは思えなかった。かなりの負担だろうと思った。なけなしの貯金を取り崩しているのだろうと想像した。しかし、相手がくれるのだ、何も強制しているわけではない。そう思うと気が楽になった。反応は女の方からあるだろう。その時はその時だ。この状態がある期間は連続するにちがいない。今男には精神的負担はない。でも、いずれにしろ次第に負担になってくるだろう。それはわかっていた。しかし、その時取るべき行動は男自身にも予想がつかなかった。その時になって考えればいいと思った。

女はどこに勤めているかも言わなかった。男も聞かなかつた。しかし、口には出さなかったが、男は推測できた。聞けば女の衣服を剥ぐような気がしたからだ。女にも時間だけが流れていた。男にはそう思われた。

女と知り合つたのは、夜のバス停留所だった。その夜は雨が降っていた。車が盛んに飛沫を飛ばしていく。その度に男は傘で防いだ。それでも身体は雨にぬれた。そこに女が来たのだ。女は傘を持っていなかった。すでにかなり濡れていた。近くの家から出てきたのではないことが一目で分つた。

男は傘を女にさしかけた。女は驚いたように男を見た。目

許の美しい女だった。一瞬、迷惑そうな表情が顔に浮かん

男は自分の善意がおせっかひだったことを知つた。しかし、男は傘を女にさしかけたままだった。女が避ければ、それ以上の善意を押しつけるつもりはなかった。女は男から自由だった。でも女は逃げなかった。男の傘の中で雨脚をしのいだ。バスがきた。男は女と一緒に乗りこんだ。男が先に座つた。男は自分の務めは果たしたと思つたのだ。席はかなり空いていた。しかし女は男の隣に座つた。意外だった。女は他の席に座るものと男は思つていたのだ。男は傘をさし掛けてやつた時の迷惑そうな女の表情を思い浮かべた。女は男をチラッと見ると軽く頭を下げた。男は傘をさしかけてやつたことへのお礼だろうと思つた。雨は激しく降つていた。バスの屋根を叩く雨音がエンジンの音を消し去つていた。

自分が下りるバス停が近づいてくると、男は女に「降りますから」と言つて立ち上がった。すると女も、「私も降ります」と小さな声で言つた。バスが止まった。女は雨の中に下りた。男は降りると女に傘をさしかけた。女は逆らわなかつた。女が急ぎ足で歩いていく、男は追いかけるように歩いた。傘が時々女に遅れた。その度に女の肩が雨に濡れた。その雨で女のピンクの上着が濡れた。上着はベージュに変つた。女はビルの前で立ち止まった。

「有難うございました」

女は顔を少し上げて言つた。女は足早にビルの方に駆けて行く。男はその後姿を眺めていた。細い足が時々一本の

コスモスになった。細い茎の先端に真っ赤な花がゆれていた。その脚を街灯がぼんやり照らし出した。男はファッション・ショーのモデルを思い浮かべていた。女が突然振り返った。男は慌てて顔をそらした。男は逆の方向に歩き始めた。男は女の視線を背中に痛いほど感じていた。雨脚がひどくなった。

二.

二度目に女にあったのは昼食時だった。男がレストランに入ると目の前に女が座っていた。和食を食べていた。女が目を上げて男を見た。女は男に気がつくこと立ち上がって、「この前は有難うございました」と言って頭を下げた。いつもの小さな声だった。男は軽く頭を下げた。男は女に「ここ空いてますか？」と訊ねた。女は軽く頷いた。男は女の前の席に座った。女は尋ねた。「お勤めは近くですか？」と尋ねた。男はいまいに返事をした。男の顔に動揺が現れていた。

男は無職だった。つい最近まで、中堅のデイスカウント・ストアに勤めていた。店長を任されていた。従業員は三十人いた。その従業員もほとんどが女性のパートだった。正社員は五人だった。男は使い込みをしかけていた。些細な額だったが、会社の臨時監査でばれた。直ぐ弁償した。しかし、それで信用が回復するものではない。すぐに辞表を書いた。

男が辞めても店は困ることはない。男はその他大勢でしかなかった。店長候補は会社のどこにでもたくさんいた。店長

の職は特別な技能とか技術は必要ではなかった。経営方針の決定権は現場には全くなかった。経営企画室の指示どおりに動けばそれで足りた。店長が口出しできるのは、売れ残りの処理程度だった。男の存在は店にとつて必要条件ではなかった。

無職になると時間が追いかけてきた。逃げて、逃げて、逃げ切れなかった。男はパチンコにおぼれた。男が雨降りの夜に女に出会ったのはパチンコをしての帰りだった。パチンコは時間つぶしには最適の遊びだった。しかし時間と万札の消失は完全に比例していた。その夜も二万ほどすっていた。預金通帳の残高欄がふと目に浮かんだ。

女が突然話しかけてきた。男ははつと我に帰った。顔を挙げる。そこに女の顔があった。少しはにかんでいるように見えた。女はもう一度言った。「次の日曜日お忙しい？」はつきり聞こえた。女の顔が大きく見えた。女の食べのこした刺身が目にはいった。醤油で塗られてヒルようだった。ヒルだったから食べ残したのだろうと思った。女はドライブをした。女はひとり言のように言った。

男は韓国の映画『悪い男』の女を思い浮かべた。そうであつてほしいと思つた。しかし確信は持てなかった。

三.

女は運転には慣れていた。見事なハンドルさばきだった。男は弁当をコンビ二で二つ買って持ってきていた。一つは女の方だった。女は「そんなことはしなくてもよかつたのに」と言った。女は弁当を作ってきていた。「自分で作ったのよ」と言つてにこつと笑つた。車はレンタルだった。ドアに会社名が張りつけてあつた。

坂を上り詰めるとそこに大きなダムが見えた。みんなゼミの鳴き声が聞こえてきた。女は無言で運転を続けた。男も黙つて景色を眺めていた。気詰まりはなかつた。女も同じだろうと思つた。女の横顔にあの雨夜の迷惑そうな表情はなかつた。どこを走つているのか男には分からなかつた。同じ所を回つているように錯覚した。しかし窓の景色はみな違つていた。女は何度もここには来たことがある様子だつた。

車が止まつた。「お昼にするわ」女は独り言のように言つた。道の脇に小さなベンチがあつた。女が弁当を差し出した。巻き寿司が三本きれいに並んでいた。隣のベンチには若い男と女が座つてゐる。楽しそうに話してゐた。時々笑い声が聞こえた。せみの鳴き声が小さく聞こえた。その鳴き声は二人連れの笑い声でときどき途切れた。女は前にある池の水面を見つめていた。「何を見ているのだろう?」。しかしその焦点は分からなかつた。別に関係ないことだと男は思つた。

男が女のアパートに駆け込んだのはそれからまもなくして

からだつた。女とスナックに行つたとき、別れ際に女が言つた。

「うちにきてもいいわよ」

あなたのことは何もかも知つてゐるといふ表情だつた。男はたじろいだ。予想外の言葉だつたからだ。しかし、男の持ち金は底をついてゐた。今月のアパートの家賃を払えば完全にお金は底をつく。結局、男は女のアパートに転がり込んだ。女のアパートは男のアパートからそれほど離れてはいなかつた。

女は拒否しなかつた。女は男の首に手を回した、温かい腕の感触が男のほほを刺激した。女の体はやわらかだつた。美しい体だつた。女は燃えた。女は燃え尽きた後に言つた。

「あなたはあなた、私は私よ、いい?」

女は男の顔を見上げて言つた。男はそのときそれほど、その意味を理解していなかつた。それぞれ自由に生きればいいのかと思つてゐた。そのようなお互いの生き方が負担になるだろうとは思つてゐなかつた。

転がり込んだ翌日から食台には一日おきに万札が置かれた。男はふと戸惑いを感じた。「使つていいということなのか?」それ以外に考えようがなかつた。一日目は恐る恐る使つた。女が何か言つたら返せばいいと思つた。その夜男は女に尋ねた。女は言つた

「仕事ないんでしょ? 使つていいわよ」

それは欠けることがなかつた。男はその万札を持って家

を出た。

「これでしばらくは働かなくてもいい」

男は思った。男には仕事をしようという意欲はまだなかった。夜は遅く帰った。女と顔を合わせるのが億劫だったからだ。金をもらっているという負い目もあった。いやそれが大きな原因かもしれない。しかし男にとって時間が静かに流れることは、必須条件だった。何故だか分からない。

男は競馬場を出ると行き付けのスナックに立ち寄った。西日はすでに山に隠れていた。競馬場に四時間いたことになる。男は、賭け事は好きだった。おそらく父親の遺伝子が入り込んだのだと男は思っていた。

父親は自衛隊に長くいた。時々家族連れで競馬場に行った。しかし父親が馬券を買うのは一レースに二、三枚だった。家族は芝生に寝転んでレースを見た。昼になると母が弁当を広げた。男は海苔巻が好きだった。母親の海苔巻は誰にも負けないと、男は誇りに思った。男にはそのころの競馬場の風景が心のどこかに残っていて時々具象化した。馬券売り場の向かいに並んだ飲食店の風景が男の脳裏にしっかりと刷り込まれていた。父は男が小学二年生のとき亡くなった。涙を流した記憶はない。

祖父は花札賭博が好きだった。田舎では時々花札博打があった。祖父は毎回加わっていた。叔父が時々止めるように忠告した。そのたびに祖父は生返事を繰り返して決してやめるこ

とはなかった。男は賭け事好きは遺伝だと思っていた。亡くなった父も祖父から受け継いだ遺伝子にしたがつて競馬場に行っていたのだろうと思った。

四.

女との会話は少なかった。女はそのことをそれほど気にしていない。それは女の言動で理解できた。表情が変わらなかつた。無表情というのではない。言葉遣いも時間にも起伏がなかつた。

男は少し負担になり始めていた。女は男の裸の胸をなでながら「意志の疎通はこれで十分だよ」と男の顔を胸に押し付けながら言った。そのときはそれで納得した。女のふくよかな肌に心のしこりが解けていった。しかし朝がくるとそのしこりが再び体積を増し、重くなった。その繰り返しの中で時間が過ぎていく。男は夜がくるのが待ち遠しかった。女を抱けば心の平穏が保たれる。しかしその違和感は少しずつ増していくのがわかつた。

競馬場で知り合ったKの言葉が浮かんだ。「お前たちの関係はいずれ終わるよ。お前が去るか、女が去るかだ。お前の生活は間違っている。ヒモになるなら徹底してヒモになるんだ。女を支配するんだ。そうでないと女も不幸だ」

人間には相性がある。Kとは馬券売り場の向かいにある、おでん屋で顔を合わせた。お互いに顔を見合わせたたん親近感を持った。Kもそうだった。男を見た瞬間Kの表情が穏

やかにになった。笑顔がこぼれた。男はKの席に引かれるように歩いていった。Kは卵を食べていた。表面がスूपで茶色に変色している。Kは卵を続けて二つ食べた。Kが尋ねた

「連勝式かね？」

男はうなずいた。

「今度のレースはだめだよ。穴狙いかね？」

Kは男より年配という事を知った上で話している。言葉がぞんざいだった。男もそれは知っている。Kの髪は耳際のほうが少し赤茶けていた。髪は染めているのかもしれない、でも競馬に来るほどの人間に髪を染めるようなダンディさはないだろう。顔のしわも多い。四十四、五歳だろうと思った。

「そこでもないですけど」

「そうだろうな。穴狙いは身の破滅さ。そんな奴はいずれ顔を出さなくなる。すつからかんになつてね」

腕を組みながらKは言った。話が途切れた。男はKから離れた。Kは何も言わなかった。黙って立ちつづけていた。何を考えるでもなく空を眺めていた。

男はハローワークに行った。女から小遣いをもらつての毎日は、初めは気楽だったが、日が経つにつれて気が重くなつてきたのだ。女の万札提供がいつかは途切れるだろうと思つた。女には黙つて数社の入社試験を受けた。三社から合格通知が来た。一番無難だと思えた警備保障会社に就職した。出勤初日、早く起きると女はいぶかしげな表情で尋ねた。

「仕事でもするの？」

男は「うん」と言っただけだった。女はそれ以上何も聞かなかつた。女は弁当を作ってくれた。手馴れたものだった。臨機応変だった。おかずはありあわせの卵焼きやソーセージ、高菜漬の油いためなどだったが、結構おいしかった。

警備員の仕事は夜勤があつた。二十四時間の勤務でその翌日は二十四時間休日だった。警備時間中にも仮眠時間はあつた。だから時間の余裕はあつた。男はそれが苦痛だった。酒を飲んで退屈さを紛らわした。一定の時間に巡回すれば、それ以外は警備の詰所にいればよかつたのだ。休日は相変わらず競馬場に行った。

もちろん警備会社に勤めるようになってからはその回数は激減した。ほぼ一週間に三回ほどだろうか。もちろんKと会うことも少なくなつた。会つても挨拶をする程度だった。別に忌避したわけではない。Kとじっくり話してみたい気持ちはあつた。Kは何を生業にしているのだろうか？ 男はKの過去を知りたかつたのだ。他人の過去を知つてどうするのだ？ そんな思いが時々去来した。さらに女との関係についてもつと聞きたかつたのだ。そう思いながら内実はKの生き方から男は何かを学び取りたかつたのだ。

五.

女の態度が変化し始めたのは男が警備会社の仕事についてからまもなくしてのことだった。本当は仕事についたときか

らかもしれない。男が、気がつかなかっただけなのかもしれない。具体的にどう変わったかと聞かれても男は説明できなかった。万札はいつものように食卓に置かれていたし、女がセックスを拒否したわけでもない。いつものとおりのお互いのつかの間の快楽におぼれた。

女の視線が変化したのでもない。必要なときは、女は男を真正面に見据えた。それでも男には女の変化を感じ取ることができた。男はその変化の原因を考えた。男が変わったのは仕事をし始めたことだ。それに伴って競馬場がよいが減ったことだ。この二つの一つが原因であることは間違いない。男は女に暴力を振るったこともないのだ。競馬場に行く回数が減ったことが女に不利益を与えたとは思わない。物理的には変化しても女の精神面に不利益を与えることには思えなかった。だとすれば女が変わった原因は男の就職だ。男は自分が就職したことで女に不利益を与えることがあるのか考えた。しかし分らなかった。

女は去った。男が夜警を明けて帰ってくると女はいなかった。部屋がいつもよりきちんと片付けられていた。予想できたことだった。男にそれほどの驚きはなかった。内内漠然とだが、覚悟ができていたと思う。

きつかけが仕事を始めたことであることを理解しながら、そのことがなぜ女を去らせる原因、理由になったのか分からなかった。経済的には女は楽になったはずだ。もともと男が

就職したから万札を止めたわけではない。でも男の金銭的ゆとりは以前よりできたはずだ。男の金銭的ゆとりが女を不安にさせたのか？ それは男には理解できない事だった。女の書置きが食台にあった。

「あなたには悪いと思うけど、私は出て行くわ。あなたに存在価値が認められなくなったからなの。私のためにあなたは必要だった。そう、あなたと会ったその時のあなたが必要だった。ところがあなたは私と同棲するようになって少しずつ変わって行つた。どう変わったかといつても、はつきりとは答えられないけれど、あなたは私の生理的一部分から分裂して距離を置くようになった。細胞分裂して離れて行くヒドラ幼生のように。

あなたに好意を持ったことは間違いないの。セックスも満足していたわ。しかしあなたは自立の道を歩み始めた。あなたは私の一部であつて、それで初めて私にとっては価値がある人間だった。私は所有権が絶対的でなければ気が済まなかったの。条件がついている、或いは期限付きの所有権には興味がなかった。つまり無担保のあなたが必要だったの。あなたが私と対等になれば、そこには所有する者と所有される者との関係は終了する。そんなあなたには興味が無い。私にとつてはわずらわしい存在でしかないの。私は一人で生きていくわ」

六

男は、また独り身になった。別に不便はなかった。炊事も経験していたし、洗濯も不便はなかった。しかし、夜の独り身はさびしかった。時々女の肌を思い出して自慰をした。女と暮らす前は、ポルノ雑誌のモデルと交合する自分を思い出しながら自慰をした。でもその寂しさにも慣れていった。警備員の仕事の持ち場は時々変わる。一定の場所での仕事は少ない。会社の夜警であったり道路工事の交通整理であったり、駐車場の管理であったりする。この持ち場の変遷が男の心を不安にした。なぜだか分からない。ビルの建物を巡回しながら、「俺は今何をしているんだ？」という疑問が浮かんできた。「なぜ俺は今交通整理をしているんだ」。タクシーの運転手から「信号が間違っているよ。しっかりとしてくれよ」と注意されたとき、男はそう思った。「俺は必死でこのトラックを運転してるんだ。もっとしっかりと合図しろ」とトラックの運転手が男に向かって怒鳴る。男は深く頭を下げる。頭を下げることに、これが生きる方法としては最善の策だと男は確信している、そんな頭の下げ方だった。

男の頭の片隅にしまいこんでいた女の面影が次第に薄れていく。男は大学で受けた講義を思い出す。「時間は全てを押し流していく。だから人生は平等なのです」あの年老いた好々爺の教授がささやきかけるように言っていた声がじわじわとよみがえる。

男はアパートに帰るとシャワーを浴びた。頭から水を浴び

ながら、男はほっとため息をつく。今日は十時過ぎに仕事を終えた。途中で食料品店に立ち寄る。男は夕食に弁当を買った。売れ残りだから、半額のラベルが貼り付けられている。目立つようにオレンジ色である。男は時々自炊をした。女と一緒に暮らしたときは何一つ台所の品物に手を触れたことはなかった。それがしばらく男の不安となった。

しかし慣れてくるとその不安は消えた。今は自炊をしながら、いつまでこんなことをするのか？ という新しい不安が生まれている。コンビニで弁当を買うときも、いつまでこの行為が続くのか？ という不安が頭を過ぎる。

男は、呆然として街角に立ちすくむ。そして映画『悪い男』の女を思い浮かべる。女は微笑んでいた。

(二六)